

## 国際山岳連盟 (UIAA) における登山委員会の活動内容紹介

ーベルン会議に出席してー

遭難対策委員会委員 青山千彰

早いもので、2009年5月UIAA総会において、登山委員会 (Mountaineering Commission) の投票権を持つ正規委員 (Voting member) に選ばれて以来、2年の歳月が流れた。年2回の会議出席が課せられているため、今回のスイス、ベルン会議 (UIAAの本部で実施) を入れて、既に5カ国で開催された委員会に出席したことになる。

国際山岳連盟 (UIAA) は日本山岳協会の上部団体に位置づけられる組織であるが、日山協の関係者でさえ「UIAAの中で、どのような活動が行われているのか、見えにくい」との声が良く聞かれる。そこで、今回は、『登山委員会の活動』について、ある程度右と左が分かってきたこともあり、紹介していきたい。

### 1. 登山委員会の組織構造

当委員会の構成委員は大きく二つに分かれる。前述の投票権を持つ正規の委員と通信委員 (Corresponding member) である。正規委員の選出には、委員長に決定権はなく、UIAA総会で決定される。一方、通信委員は、遠隔地で会議出席が難しいケースや特殊な領域の専門家のケースが該当し、委員長の裁量で選ばれる。出席しない場合は、委員会から議事録など活動資料が送られる。登山委員会では18名の委員と5名の通信委員から構成されている。

登山委員会は、UIAAの8つの専門委員会の中で、登山技術および登山倫理と登山規則を扱うメインエンジ的な役割を担っている。この活動を支える形で、2つの専門ワーキンググループ (①登山教育の標準化WGと②法律専門WG; 以下ワーキンググループをWGと略称) を抱えている。ただし、一般に理解するワーキンググループとは異なり、専門部会と言ったものであろうか、独立性が強く、登山委員会の委員と共にWG独自の委員と通信委員を持っている。特に、法律専門WGには弁護士、検事などが専門家として参加するため、その傾向が強い。

### 2. 定期委員会活動から見た作業内容の紹介

年2回開かれる委員会は、3日間朝から晩までコーヒブレイクとランチを挟みながらハードな作業と議論が続く。そこで、今回のベルン会議での主な委員会活動の一端を紹介すれば、ある程度活動内容が理解して頂けるのではないだろうかと考えている。なお、法的問題や審議事項等については、守秘義務があるため、制限された内容となる。

第1日目、まず、前回議事録確認後、委員の出欠確認と人事から始まる。次に、委員長と、担当理事、さらに、他の委員会兼任委員から、UIAAが現在抱えている主な問題、展望、各委員会での活動状況が報告される。

今回詳しく報告された、医療委員会 Medical Commission では、他のレスキュー団体による認証上の問題点、ドーピング問題、低酸素症、などが話し合われていることが紹介された。一方、安全委員会 Safety Commission では、設備標準およびリスクマネジメントな

どを、クライミング界に普及させるため、一連の出版物（安全基準の教育ビデオ、(※1)SAC安全クライミングの翻訳、(※2) BMC の保存設備など）を作成してきた。また、ホームページ上に、後述する(※3) リコール用品のデータベースやブラックリスト、問題用具への警告などをあげている。これらの情報は登山者の方々には非常に役立つと思われる。他にも、青少年委員会、アクセス委員会、自然保護委員会、探検登山委員会などの活動について、簡単な説明がなされた。

事務局からは、登山委員会と他の委員会との情報交換や共同作業などをより効率化するため、グーグルドキュメンツを基盤とするドキュメントファイルやメールの管理システムの採用などが提案された。登山委員会と他の委員会間の交流は兼任委員を通じて活発に行われている。日山協においても、管理レベルではなく委員会レベルでの交流、共同作業などの活動は大いに参考になるとと思われる。

### 3. 教育と法律、二つの WG 活動の特徴

第 2 日目においては、「登山教育の標準化」と「法律専門」、二つの WG に別れた会議がもたれる。なお、後者は主に法律専門家の集まりのため年 1 回のペースで開かれる。二つの WG が開催されると、私は事故専門ということで後者に加わる。今回は法律 WG が開催され、そちらに優先的に参加したが、前半は登山教育に加わることになった。

登山教育の標準化 WG は去年日山協の 50 周年で招待した Steve Long 氏が代表を務める。本委員会の中心的な役割を担っている。既に、UIAA 方式のボランティア登山教育の標準化活動は、10 年以上の試行段階が終わり、世界規模での第 2 期普及段階に至っている。2 回前のバルセロナ会議より、「どのような人々に提供するのか」、「どうすれば多くの人々によりよく理解されるのか」、「その経費はどうあるべきか」などが話しあわれてきた。今回は、UIAA の収入源として位置づけ、標準ラベル発行問題やウェブサイトの利用、さらに、提供される教師派遣、訓練、セミナー、認可、妥当性の再確認などについて話し合われた。UIAA の登山教育承認国（団体）もインド、ロシアと増加しづけており、やがて、アジアでの普及拡大も時間の問題と考えている。

会議に耳を傾けながら、「今後の日本の（日山協の）登山教育はどこに向かおうとしているのだろう」といつも考え込んでしまう。「結局、このまま日本流マイウエイ教育路線を強行していくのか？」 「登山教育の標準化といっても、日本流教育内容の一部（特に資格認定）の変更で受け入れられる」と思うのだが。日本に好印象を持ってくれた Steve 氏には、積極的に参加できない我が国の登山教育事情の複雑な背景について、説明はするものの、割り切れないものを感じている。

一方、法律専門 WG は、今回代表であった Renee Hopster から Xabier S. Ezeizabarrena に交代した。当メンバーが法律専門家から構成されるため、審議内容や法律データベースの詳細については、戦略的な問題として、一般公開は禁じられている。その仕事は、UIAA の法的問題へのサポート（例えばドーピング問題）、欧米で起こる登山関連事故裁判での権利放棄 Waiver 問題へ解釈、異なる裁判権における鑑定書の扱い、登山裁判データベースの

構築など多岐にわたる。ただし、特定の国で発生した裁判問題に対して、参考となる情報を提供できるが、対応する組織ではない。データベースには、既に、日本での裁判事例を入力した。他国に比べ、引率系登山事故の裁判事例が多いのが特徴のようである。

#### 4. 登山倫理、事故調査

活字は白紙書か致くおまじやう。

第3日目は、最終日である。倫理、ホスト国（今回はスイスアルパインクラブ SAC-CAS 活動）の紹介、統一山岳事故調査フォーマットによる調査と事故統計などが話し合われた。

今回、倫理部門については、大きな動きはなく、総会での伝統的クライミング WG の発足について報告があった。従来、UIAA では、倫理を最重要事項として位置づけてきた。2002 年のチロル宣言など、長い討論を経て、2009 年当委員会から提出された登山倫理宣言 (Mountain Ethics Declaration) が総会で承認された。登山倫理は、「国際山岳連盟として、何を目指すべきなか、何に基づいた行動原理であるべきか」、その姿勢を示したものである。継続審議されているボルト問題 To bolt or Not to Be など、今後とも、登山委員会にとって最重要審議事項となっていくと考えている。

最後に、「統一山岳事故調査フォーマットによる調査と事故統計」が私に課せられた役割である。UIAA は世界規模での山岳遭難事故の実態を把握できていない問題を抱えてきた。特に、その活動の中心にあるアルプス周辺での事故実態でさえ、正確につかめていない。安全登山を目指した教育活動を行い、リスクマネジメントを打ち出す以上、登山事故統計による実態把握と分析、そして対策の検討が絶対に必要となってくる。

統一事故調査フォーマットとは、事故調査のアンケートを世界規模で統一したフォーマットで実施するものである。既に、10 カ国の事故調査報告書を集め、これらの調査項目から共通項の取り出し作業が終了した。今回は、初めて、統一アンケート調査（案）を提出した。この事案に対する委員からの反応は「調査の趣旨賛成、実施は難色」というところか。実際に、動き出すと大変な仕事が予想されるため、なかなか首を縦に振ってくれない。そのため委員長の Pierre が AON など保険会社に事故調査の協力依頼のためアクセスを開始している。今後、安全委員会や医療委員会とも共同作業になっていくのではないかと考えている。

#### 5. 終わりに

自分の英語能力で登山委員会での仕事は厳しい。しかし、委員として参加することで、今まで見えなかった UIAA の組織、その仕事などが何とか見えるようになり、加えて、人的つながりが増し、膨大な情報が入手できるようになってきた。登山委員会の審議内容を詳細に報告することは難しいが、今後とも、できる限り、その活動状況を伝えていきたいと考えている。

(※1) SAC: Swiss Alpine Club

(※2) BMC: British Mountaineering Council

(※3) UIAA リコール用品のデータベースについては、安全委員会のサイト Recalled equipment & Advice notes [http://www.theuiaa.org/certified\\_equipment.php](http://www.theuiaa.org/certified_equipment.php) から検索することができる。また、同じページにはブラックリストも掲載されている。



UIAA 本部ベルンにおける登山委員会参加者